

来たる年も力を尽くしたい

「とまれ、この仕事^が新たな世界に通ずることを祈り、真っ白に砕け散るクナール河の、はつらつたる清流を胸に、来たる年も力を尽くしたいと思います。良いクリスマスとお正月をお迎えください。」

——中村 哲 (ペシャワール会報142号・2019年12月より)

無力だからこそ、出来ることがある

——中村医師逝去後の五年を振り返る

PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)総院長/ペシャワール会会長 村上 優まさる

はじめに

二〇一九年十二月四日に中村哲医師が亡くなってから五年の歳月が過ぎました。その喪失感、その悲しみは直接活動を共にしたPMSスタッフやペシャワール会の会員・支援者にとどまらず、アフガニスタンでも日本でも瞬またく間に広がりました。悲しみと喪失感が中村医師の現地事業を継続する力に置き換わったのは、彼が手掛けた事業や会報・著書に遺した言葉が私たちの背中を押し続けてくれたからです。

アフガニスタンから帰国する棺ひつぎに付き添って来日したPMS副院長ジア先生、ディグラー技師と再出発を確認したのが始まりでした。それから五年、事業を進めることができたのは、アフガニスタンと日本両国の人々の支えがあったからです。新しく仲間や支援者として加わった方々も大勢おられます。この五年の間に、新型コロナウイルス感

染症の拡大、頻発する地震、温暖化に起因する干ばつ・洪水・火災などが、世界中で起きました。二〇二一年八月にタリバンが復権し、アフガニスタンでは戦争が終息したものの、間を置かずウクライナ、ガザ、さらに新たな戦争の気配も伝えられています。言葉を失うしかない惨むごい破壊と死の前では無力ですが、「人として出来ることは？」と中村医師に問い掛ければ、「目の前に困っている人がいれば手を差し伸べることだ」と答えるでしょう。無力だからこそ、出来ることがあると、中村医師はその行動で示しました。「自然と人、人と人の和解を探る以外、我々が生き延びる道はない」(『天、共に在り』)のです。

中村医師への共感の輪

二〇二〇年二月、インドでPMS主要メンバーとペシャワール会メンバーが集まり、中村医師の精神を継承し、事業を継続する



進行中のナージアン事業、取水門背面で護岸の蛇籠積みを行なう作業員たち。(2024年10月5日)

ことで心一つにすることができました。

国内では、PMS支援室の役割の確立に加え、土木技術の専門家ボランティアによる技術支援チームができました。事業継続を報告する写真展や講演会、中村医師の軌跡をまとめた映像記録『荒野に希望の灯をともす』（日本電波ニュース社）の制作、『中村哲思索と行動』（上下巻）の出版、その他にも映像や出版物が相次ぎました。その結果、ペシャワール会の支援者は約一万六千名から二万六千名余に増え、円滑な事業継続の基礎となっています。

九州大学では「中村哲先生の志を次世代に継承する九大プロジェクト」として、中

村哲記念講座や九州大学中央図書館での展示スペース「中村哲医師メモリアルアーカイブ」の設置、「中村哲著述アーカイブ」のデジタルデータの集積が進んでいます。

現地事業の成果など

PMSによる現地事業は、二〇二〇年十二月に始めたクナルル河でのPMS方式によるバルカシコート堰・用水路が二年九月に完成。同年十月から新たな試みとして中小河川から取水するバラコット堰・用水路建設を開始し、二四年三月に完成。そして今、ナージアン郡の中小河川でも工事が進んでいます。これらは中村医師が構想しつつも手掛けられなかったPMS方式の応用編で、まだ課題も多くありますが、干ばつの進行で耕作が厳しい谷間の地域を潤すことを目的としています。

また、完成した堰でもミラーン堰やカシマバード堰などで補修を要し、維持管理が思いのほか難航するところもあります。PMS技術者と技術支援チームが工夫を重ねています。

灌漑エリアが広がり、PMSのガンベリ農場も様々な作物が収穫できるようになり、中村医師の思いのこもった救荒作物であるサツマイモ栽培も地元で根づき始めました。ドラエヌール診療所は多くの人々に安心と癒しを提供しています。

中村医師からの負託に込めて

亡くなる直前に中村医師が西日本新聞に寄稿し、十二月二日に掲載された文章を紹介します。クナルル河の左岸にあるゴレーク村を訪ね、支援の狭間にあった村人から相談を受けた際の思いを書いたものです。「約十八年前（二〇〇一年）の軍事介入とその後、の近代化は、結末が明らかになり始めている。アフガン人の中にさえ、農村部の後進性を笑い、忠誠だの信義だのは時代遅れとする風潮が台頭している。

近代化と民主化はしばしば同義である。巨大都市カブールでは、上流層の間で東京やロンドンとさして変わらぬファッションが流行する。見たこともない交通ラッシュ、霞のように街路を覆う排ガス。人権は叫ばれても、街路にうづくまる行き倒れや流民たちへの温かい視線は薄れた。泡立つカブール河の汚濁はもはや河とは言えず、両岸はプラスチックごみが堆積する。

国土をかえりみぬ無責任な主張、華やかな消費生活への憧れ、終わりのない内戦、襲いかかる温暖化による干ばつ——終末的な世相の中で、アフガニスタンは何を啓示するのか。

見捨てられた小世界で心温まる絆を見いだす意味を問い、近代化のさらに彼方を見つめる。』（『中村哲思索と行動 下』所収）

現在、ゴレーク地区での事業は、対岸のシェイワ地区との協議が難航し、棚上げになっています。

タリバン政権が復活して治安は回復してきたものの、今のアフガンは日本で言えば戦国時代から江戸時代——自国の宗教や文化を土台に一つの国家としての形を作ろうとする時期——のように思われます。

中村医師は「焦ることはありません。私たちには時間があります。どこから何を見ようとするかで、ずいぶん印象が異なります。騒々しい情報世界を離れ、悠久の自然と人の営みに焦点を当て、今後も歩いて行きたい」（会報一一五号、二〇一三年）と、歩む道を示してくれました。時間をかけてゆっくりとその道を歩いて行きます。